
死神くんと菜ちゃん

たすく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神くんと栄ちゃん

【Zコード】

N7812Y

【作者名】

たすべ

【あらすじ】

自サイトより転載。

2000年ぐらいに書いたものらしい…クロス物で、栄が死亡死神くん登場みたいなお話。

「迎えに来たぜ」

だろ？）

(……………でも、あの世アメニへ、どうぞ行ってくん

(・・・・・・・・・これから、あの世に行くんだね、私。)

(. . .)

(. . .)

(お父さん……お母さん……お姉ちゃん……)めんね……

(ああ……そうか、私は死んじゃったんだね。)

(私は確か病院のベッドで寝ていたと思うけど……)

(・・・・・・・・・・あれ?)

(. . . .)

(. . .)

空中に浮いていたパジャマ姿の少女は田の前の子供の出現に驚いた。自分と同じように空中に浮いている子供。

「・・・えと、迎えに来たとか言いましたけど・・・」

「ん？ ああ、自己紹介が遅れたな。俺はこう言う者や」

田の前の子供は懐から一枚の紙を取り出して、少女に差し出した。

「名刺・・・ですか・・・」

受け取った名刺を見る。そこにはこう書かれていた。

【靈界行政機関靈魂取扱官庁・死神 N.O. 413 靈界三・六B
(T.E.) 13 - 4444】

少女の田は大きく見開いた。

「し・・・死神・・・さん・・・ですか？」

「そう。俺は死神だよ」

「そう・・・ですか。私本当に死んじゃつたんですね・・・」

「ま、正確には違うけどな」

「へ？」

「君の頭の上にうつすらと見えるだろ？ 管みたいな物が」

「はあ、確かにありますね」

「これは君と君の肉体をつないでるものなのさ。これが切れてはじめて死ぬのさ」

「じゃ・・・じゃあ・・・私まだ生きているんですね！？」

「まあそう言う事かな？ 下見てみなよ」

少女は足元を見た。

病室。

白衣を着た医者が何か叫びながら、看護婦に指示をしている。少女の体には色々な管がつながっていた。
その近くには・・・

「栄！ しおり――――――――――――――――――――――――――――

泣き叫ぶ叫ぶ少女の姿があつた。

「・・・・！ お姉ちゃん！――――――――――――――――――――

栄は言葉を失った。田には涙を溜める。

「よくわかったかい？」

「・・・・・・・・・・・・

「ちょっと酷だつたかな」

「・・・・・・・・・・死神さん」

「何かな？」

「どうやつたら、私生き返れますか！？」

死神の襟元に掴みかかる栄。

「ぐ・・・・苦しい・・・・

「お願いします！ 私、生きたいんです！ 生き返らせてください

！――

「く・・・・苦しい・・・・ はなし・・・・て・・・・

「あ

顔が青くなっている死神。栄は手を離した。

「じめん・・なさい・・・・

「は～。苦しかった」

「…………」

「栢ちゃん」

「はー」

「君の生きたい意思はよくわかった」

「はー」

「でも、俺では君を生き返らせる』とは出来ないんだよ」

「な・・・!」

「俺の仕事は魂を靈界に運ぶこと。それ以外は勝手にできないんだよ」

「それじゃ・・・何のために・・・私の前に来たんですか・・・?涙ぐむ栢。死神は困った顔をしている。

「ごめんよ」

「謝られてもどうにもなりません・・・」

「栢ちゃんの場合は『誤死』と書ひてね、たまに起じるんだよ・・・」

・

「『?』?」

「うん。こればっかは主任に許可を得ないとなあ・・・」

「しゅにん?」

「俺達死神を束ねる主任さ」

「人間の会社みたいですね」

「まあ・・・そうだけど・・・じゃ、栢ちゃん行くよ

「主任さんの元ですか?」

「靈界へ」

そういうと死神と栢の姿は消えた・・・

栢は気がつくと、雲の中にいた。

(ここが・・・靈界・・・ですか。)

死神と共に雲の間を進んでいく。そして、雲に囲まれた大きな部屋が現れた。

(雲の中に・・・・・部屋ですか・・・・)

その部屋の中央に机があり、誰かが座っていた。机の上には『主任』と書かれた立て札がある。傍らには巨大な漆黒の鎌が立てかけてあつた。

(・・・・・！――！――！)

栢の目は大きく見開いた。

彼女の前には黒い布をかぶった髑髏。漫画や小説に出てくるような死神、そのままだ。

「し・・・・死神・・・・・？」

栢は気がつかなかつたが、栢の前に現れた死神と同じよつな格好をした人たちがいた。

「さすが主任」

「有名人だなあ・・・・」

「俺達、名刺出さないと信用されないんだもんなあ・・・・」

「うんうん」

勝手なことを言つていた。

「で、主任

「ん、ちょっとまで」

そういうと主任は机の上のパソコンを叩く。

(あの世にもパソコンなんてあるんですね。)

は〜、と感心する栢。

「うむ。美坂栢の死亡はかなり先になつているな

「やはり『誤死』ですか・・・」

「ところで『誤死』ってなんですか?」

先ほどから疑問に思つていた事を聞いてみる。

「死んじやいけない人間が、何かのひょうしで魂が肉体から抜けてしまうことなんだよ」

「はあ、そなんですか」

「よし、413号！ 彼女を24時間以内に戻せ！」

- はしり

再び地上

某の入院している病院上空にいた

なあ・・・

「うーん。あれ？」

死神は異様な力に気がついた。

と云ひたくて云ひた

すこい力を感する。

「おしゃべり」

「えう。待つてください! 私も行きますよー

死神がそう言つた瞬間、栞の意識はとんだ。

「桑・・・？」 しおり――――――――――――――――――

(あ・・あれ? 「の声お姉ちゃん・・・?)

(私、助かったの・・・? それとも夢だったの・・・?)

意識がはつきつとしていく栞。

「もう峠を越えたようです。もう大丈夫でしょ」
医者の声が聞こえた。

「ふ~お~りい~」

泣きじゅくりながら、ベッドの上の栞に抱きつこうとする香里。

(・・・・お姉ちゃん・・・・)

(・・・・・・・・ありがとう・・・・お姉ちゃん、祐一さん・・・・
そして・・・・死神さん・・・・)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7812y/>

死神くんと栞ちゃん

2011年11月23日11時52分発行